

## 日本霊異記下巻序の訓読：来迎院本本文の整理による

秋吉, 望  
筑紫女学園短期大学助手

<https://doi.org/10.15017/16303>

---

出版情報：文献探究. 3, pp.13-20, 1978-09-23. 文献探究の会  
バージョン：  
権利関係：

# 日本靈異記 下巻序の訓詁

——来迎院本本文の整理による——

秋吉 望

本稿は、本誌第二号に示された来迎院本による日本靈異記序の訓詁文のうち、下巻序前半のいわゆる錯乱部分の訓詁について、若干の説明を加えるものであらう。

この錯乱部分とは、真福寺本に伝えられる直前の五十字程で、来迎院本卷見以前には前田家本

のみに伝えられていたものである。この前田家本のみに伝えられた百七十七字の下巻序前半部分は、こうした短んどその大意を解することのできない錯乱部分を含んでいること、また、真福寺本訓詁

の中にこの前半部分に相当すると思われる文字で一致しないものがあること、後人の加筆によるものではないかとも言われてきた。これについては、既に前田家

本自身について、後述の中村・迫野両氏による本文の整理の試みや、問題の訓詁の位置の推定が行なわれていた。

来迎院本の卷見によって、平安時代の写本たる此本に前田家本とほぼ同様の本文が存するところから、こ

の部分の後に加筆説、偽書説は否定されることとなり、加えて、錯乱部分については、前田家本とはその字句の順序が異なっており、来迎院本をもとにした新たな本文の整理が可能となり、また訓詁についても先の西氏の説の正しかったことが証明されるなど、下巻序の訓詁は新しい段階に入つたわけである。

その来迎院本による本文整理の試案を提出する前に、前田家本による本文の整理と訓詁の方法を概観することにする。

## 二 (1)

前田家本の本文に単なる誤脱以外に錯簡があるらしいことを指摘し、語句の順序を変更して誤解を拭かれたのは、中村彦彦氏である。氏はこの錯簡を正すために、「序文の他の箇所はいずれも修辭に著しく意を用い、対句構成を基にした論理的な文脈であることに留意して、最小限度の整理に よつて文脈の打開をはかる」という方法を示された。この方法が問題の部分について有効かつ適切で

あることは、迫野氏の御指摘の通りである。すなわち、たとえは、

悪報。迦来如鏡。託鬼之人。抱毒蛇。莫朽之。

向之即現。夸刀。颯被。如谷響。喚之必應。

真福寺本

右の如く、真福寺本に見えぬ字句と対を打すと思われ、

る字句が前田家本の錯乱部分にあつたことを見ても、

ます。こうして本文整理の大前提である前田家本本文の原作であることが証せられるし、左の如き整然とした対句文であつたものが錯簡によりて右のようになつた意を解することもできないほどの文章になつてしまつたのであつたことがわかるのである。

悪報。迦来如鏡。向之即現

夸刀。颯被。如谷響。喚之必應

また、錯乱部分の直前に左の如き対句文が存すること、この部分が対句構成であつたという予想を援けることが出来るかもしれない。

夫。花咲無聲。修善之者。若石峯花。鶏鳴無涙。觀代。作惡之者。似土山毛。

次に前田家本の錯乱部分の本文と、それに対する中村氏の改訂案及び解説、文と掲げておく。

前田家本

匪。碓。因果。作罪。以比。無目之人。履。巨。失。之。

号。虎。見。尾。皆。名。利。生。疑。善。根。惡。報。迦。

未。如。鏡。託。鬼。之。人。抱。毒。蛇。莫。朽。之。向。之。即。

現。夸。刀。颯。号。惡。種。巨。被。如。谷。響。喚。之。必。應。

福也

中村氏改訂案

匪。碓。因果。作罪。以比。

無。目。之。人。履。虎。尾。巨。失。之。兮。

託。鬼。之。人。抱。毒。蛇。莫。朽。之。

皆。名。利。殺。生。

疑。善。根。

惡。報。迦。来。如。鏡。向。之。即。現。

夸。刀。颯。被。如。谷。響。喚。之。必。應。

\*3 影。脱。か。

\*2 殺。生。付。託。か。

世人の因果の理を知らずして、悪業を犯すこと、無目の人、虎尾を履いて失ふことが如く、また託鬼の人の毒蛇を抱きて朽つることなきが如く（頑冥固陋である）、かく、人、この名利殺生を好み、善根を疑い、嫌ふときは、悪報の迦来に來ること、鏡に影の映するが如く、禍力の颯く及ぶこと、谷響の喚は、直ちに應ずるが如し。

二 (2)

中村氏の改訂案を承けて迫野虔徳氏が新たに案を示され、加えて訓釈の問題にも論を進められた。今その論点をまとめると、まず改訂本文については、

\*1、中村氏の案において「虎見尾」中の「見」として「殺」とされた「見」字も「見殺生」の箇所には置き、かもしれば訓釈(真福寺本)に「甘・太久カ之比」と見えていながら本文中に見出すことのできない「甘」字の誤りとする。\*2、古典大系には「谷」とされてゐるが「お」のような字体で「貴」の誤字と考へる。\*3、疑には「如世」の訓釈(真福寺本・前田家本)があるが、ここは訓釈の方の誤解と考へ、「うたがふ」の訓をとる。

この三点を明らかにされ、訓釈については「甘」のほかに「祀壇・ニ合止之吉呂」と「祀壇・親代」の位置に補い「鳥・詭世」を「鳴人不慎乎」と前田家本に見えて真福寺本に欠けている「鳴」字の部分にあつたものとされた。

氏説によれば、真福寺本に見えながら前田家本に見出しえない訓釈もその位置を得ることができ、又「貴」「回」の二字も重出も見えただけで、他のすべての字句を使つて整然とした対句文を再構成することができ、このことは、氏の言われる如く、前田家本は、これほどの文章上の錯乱をきたしながらも、文字そのもの

迫野氏改訂案

匪磻因果 作罪以比下

無目之人 履虎尾

託鬼之人 抱毒蛇

\*1 甘 殺生 皆名利巨失之

\*2 貴 惡種 疑 善根莫朽之

惡報逆來 如鏡影向之即現

夸力颯被 如谷響喚之必應

因果を磻はす、罪を作すは、目無き人の虎の尾も履み、鬼に託へる人の毒蛇を抱けるに比ぶ。殺生を甘じて、名利の失はれがあらむことを嗜み、惡種を貴びて、善根の朽つること莫きも疑はば、惡報の逆に來ること鏡の影の向へば即ち現はるゝが如し。夸力の颯被ふこと谷の響の喚ばば必ず應ふるが如し。

ものにはそれほど著しい添加も脱落もなく、よく旧を保っていることを示すと同時に、翻つて、対句文を再構成して本文を正すという、方法の正しいものであることとも示していると考えられる。

三.

以上のように、前田家本についてはその錯乱部分の本文を整理して整然たる対句文を構成し、文意を解釈しようとする試みがなされて来た。今、新出の来迎院本の当該部分を見るに、前田家本と殆んど同じ字句を持ちながら、前田家本とはその序列を異にして、しかも錯簡があるらしく、そのままでは文意を解することもできないのである。そこで前田家本に倣って、対句構成といふことを手がかりに本文を整理することを試みた。その結果得られたのが前掲の訓読文であるが、以下、構成した対句文を示して、二三の説明を加えておく。

まず、問題の部分の来迎院本の本文は次の如くである。

匪礪因果作罪以比无目之人履叵失  
 之贖尾ト其嗜ト名利斂生疑詭鬼  
 之人抱毒蛇莫朽之号モケリ惡種不也□  
 之号善根惡報遺来如水鏡向之

即現幸 □ 毘号惡 □ 如谷  
 響喚之 □

前田家本と大きく異なっているのは、来迎院本中程の「託鬼之人抱毒蛇」「莫朽之号惡種」□「之号」の部分で、こゝからは前田家本では「惡報遺来……」と「夸力颯……」という、明らかに対句となさへべき二句の間に入りこんでいたものである。すなわち、来迎院本では「惡報……」と「夸力……」との一対は、そのまま接して対句の形を保っているわけであるから、他の部分にも元来の対句の形が残されているのではないかということも期待されるのである。それゆゑ、この本文を整理するにあたっては、一応前田家本において得られた対句の構成にはとらわれずに、字句の移動を最小限度に止めることに留意した。そうして得られたのが次ページの対句文である。

この案では、字句の順序は全く変えてはおりず、ただ次の二つの字句を重出と見て削除しただけである。

。履世果其贖尾……  
 。莫朽之号惡種……  
 回失之号善根……  
 幸力毘号善根  
 如谷響

来迎院本の改訂案

匪礎因果作罪以比无目之人履贗尾

甘嗜名利殺生疑說鬼之人抱毒蛇

莫朽之号惡種

匪失之号善根

惡報遺来如水鏡向之即現

幸力毘被如谷響喚之必應  
訓詁文

因果を礎ソコに匪ヒして罪を作すは、以て目无き

名利を甘タカシと嗜シみて生シを殺すは、鬼モリに

朽クること莫ナき号ナは惡種なり。

失ヒはれはる号ナは善根なり。

惡報の遺ヒに來ること、水の鏡の向へば即ち

幸力のヒに被ふこと、谷の響の喚へば必ず  
應ふるが如し。

大意

因果の理に照らして行ないを正さず罪を作す者、ちやうど盲目の人が(後の恐てを知らず)虎の尾を履みつけるようなものである。また、名譽や利益を恣業して生物を殺すのは鬼に取り付かれた人が毒蛇を抱くようなものである。(いすれも正常な人ならは決してしない)一度行なうと消え去ることのないものは惡種であり、一方善根は一度抱せば失われぬことではない。惡報が速く返って來る様は、水の鏡のようで、それに向かへば忽ちに影が映る程に迅速である。また、幸力が早く被ふ様は、谷の響が喚へば必ず答へるようなものである。

←二底以上のように解して見たのであるが、なお問題となるべき点が多く残っている。それらを以下に記してお教えを賜わりたい。

・「以」この部分で第一の対句は破れてゐる。「以」に對應する文字が二句目に無いといふことは「匪礎」と「甘嗜」との対応部分の構成が一致しないことと重なって、この対句文全対を脅かしている。それゆゑ、二句目にも「以」字があたてたのではない

とも考えたところである。因みに、前田家本にもこれに充ててべき文字は無い。

●2. 「贖尾」 前田家本に「鹿見尾」とある。前田家本の字面では解説に「病する所」で、中村氏は衍字とされ、但野氏は「見」を「甘」の誤かとされた。未迎院本によれば「鹿」の字体が「贖尾」のようであって、この字が「鹿+見」のように誤写されていく可能性は非常に大きいと考えられる。従ってこの部分にはもともと「見」字はなかつたものと見做してよいであろう。また、前田家本は「鹿」の所に未迎院本と同じ「贖」があつたその正字形の「贖」か、字体を持つた本の系統を引くものと考えてもよいであろう。なお、複製本では「贖尾」のように仮名が見えるが、これは上の字に「ト」注するはずの「ト」の仮名であつたと考えられる。

●3. 「甘」 原文は左のようである。この「甘」字は真

其<sup>甘</sup>審<sup>ア</sup>名<sup>ミ</sup>…

福寺本の序文の末尾にまとめて掲げてある訓釈のうち、本文にその文字の見えなかつたものである。●4. 「疑」 真福寺本・前田家本とも「如也」の訓釈も付している。しかし、前田家本では文脈上「答」と対応する動詞として解説され、この訓釈はとられ

なかつた。未迎院本においては「比」と対応するものとして「コトシ」の訓をとつて「ア」か「エ」のものと考えられる。

●5. 「号」 古典大系等に「号」と写されていた字である。この字体は、前田家本では「号」のようであつて、但野氏が「貴」かとされたところであつた。未迎院本の字体は「号」のようである。この字には、前田家本に「者也」未迎院本に「モノナリ」の訓が付されているので、それに従つて訓読した。因みに未迎院本においては「號」の字体は使用されておらず、すべて「号」の字体のようである。

●6. 「叵失之号」…「惡種」○之号善根…と続く本来の場所において「失」字の部分は汚損がひどく読みとれない。従つて、ここは前田家本を参考にし、既述の如く、二十字程前の「履」○失之「贖尾」の三字を重出と見て削り、不明の字と「失」と見做した。

●7. 「水鏡」 前田家本には「鏡」としかなく、中村氏によつて「影」字が補われていた所。

●8. 「辛力」 意味上正反対の二通りの解説がなされる所である。「辛」字、真福寺本訓釈に「奉」福前田家本にも「奉」福世とある。ところが古典大系頭注に云う如く「奉」字に「福」の意の無いところ

から、この訓叙をどうする。幸<sup>カ</sup>と「禍」の音の假借として「悪報」<sup>「カカ」</sup>と同義とする解釈がなされて来た。この説に従えば、第二の対句が悪因の事について繰り返して述べたのも承けて、第三の対句において悪報について強調するのと同じことが出来る。

「カ」「福世」の訓叙を活かした解釈も可能である。その時来迎院本は文字通り「幸力」として現われるのである。即ち第二の対句において、悪種と善根とを述べたのを承けて、第三の対句においても悪報と幸力とを対立せしめたのだということになる。本稿では、複製本に見える「幸」字を活かして訓読して置く。

しかしながらこの字は一丁裏の六行、つまり綴じ目の右二行目の頭に当っており、複製本では極めてはまりこめてはいるもの、果して原本はじつであるかということがわからぬのである。従ってこれは原本の精査を待たなければ結論は出せないが、もし複製本の通り「はつきり」と「幸」字があるならば、他の二本に「幸」(福世)とある訓叙を無視して、「禍」の假借と見做すよりは、「さいわいの力」と解釈した方がよいと考へる。「幸」と「幸」との草体では誤写の可能性は十分にありと思われぬが、その場合は「幸」↓「幸」へと誤りか行かぬものと考えられる。「幸力」と誤つても古典大系注のよつに「大々力カ」として解釈できまから、そのまま伝えられたのだから、「幸力」であつたころの記憶が「福世」の訓叙を付けさせたのではないだろうか。

● 9. この部分原文の汚損がひどい。大体次のようである。

… 聽号 悪 三字分程 如谷 …

この三字分程の汚損部分には恐らく「種叵被」の三字があつたものと思われぬ。とすれば、ここは「履<sup>ハ</sup>・夫<sup>ハ</sup>・之<sup>ハ</sup>・履<sup>ハ</sup>尾」の部分とともに、前田家本と同じ錯簡の仕事をしてゐることになる。

以上、頁の付いた点もあげてみたが、またまた考へたい問題が山積してゐる。たゞこゝは「靈異記内」の他の用例と各々の比較など、今回は未だ提出することが出来なかつた。

また、来迎院本と前田家本との間の問題も興味深い。例へば、● 9 に關して、両本が同じ錯簡の仕事をしてゐること、そして前田家本の方が錯簡は更に進んでゐること、また、崎村君が前号に述べられたような錯簡の事情が来迎院本の祖本の系統にあつたかもしれないことと考へ合せると、この錯簡部分については次のような推移が考へられはしないであらうか。まず整然たる対句文であつた原文が、ある伝写の時点で来迎院本の如き錯簡を起す、そのためにこの部分の文意は解しにくくなり、そこで或る者は、その文意不明の所を切り捨て、或る者は、解す所がウ写して行く(真福本のような系統)、或る者は、文意不明のため、更に錯簡させながら、或いはさかいらにも



その錯簡を合理化しようとして一層文脈を乱しはから  
(前田家本のように)……この見方はあまりにも一面的  
に過ぎると思つが、一つの考案として提出しておく。

中間報告のようになつてしまつたが、本稿はこのま  
まの形で御批判を乞ふことにした。

〈注〉

- 1. 『聖異記』雑考』(訓点語と訓点資料 方輯)
- (七) 下巻序文の錯雑改訂試案

- 2. 『日本聖異記』下巻序の本文と訓叙』(訓点語と訓点資料 43輯)

- 3. 未詳院本ではこの部分……无涙、親代……の如く挿入すべき印が見えてあり、追野氏の説も支持するもののようにであらう。

- 4. 日本古典文学会の複製本による。同付録の解題中の山本信吉氏にもう細字も参照した。

- 5. 名義抄 法下九六 讀員讀 上俗下正胡該反 似尙カカ

- 6. 遠藤嘉基博士は「日本聖異記訓叙考——本文に於いて言われるものについて」(訓点語と訓点資料 36)に「甘」の訓叙は欄外注記ではなかつたかとしておられるがそこに止べられぬように「甘」と「苦」は同じ意味であつて、ここは同意の二語を重ねて熟語のように使用したものであろう。

7. 訓点語学会における遠藤博士の御発表によればこの複製には、仮名の位置がずれていたり、字体が改変されてきたなどの問題がある由である。

8. 『日本聖異記』の序、再考——未詳院本による検討と訓読』(文献探兎 2号 41ページ)

\*前号にも記された如く、本稿は昭和五十二年度の九州大学大学院の演習の成果である。御指導下さつた春日茂生に深く感謝いたします。

また、前号の発刊後、中村京彦氏並びに追野度徳氏より貴重な御教示を賜つた。ここに記して感謝いたします。